

ISSN0288-5

雄山

ARCHAEOLOGY QUARTERLY

季刊

考古学 163

2023.4

埴輪からみた王権と社会

Edited by 廣瀬 覚



国武貞克・國木田大・佐藤宏之
石刃石器群の起源からみた
日本列島における
後期旧石器文化の成立
考古学研究 第69巻第2号
p.56~p.73

日本列島における石刃石器群の起源を探るために、1997年に後期旧石器時代初頭の石刃が2点出土していた長野県香坂山遺跡において、2020年に学術目的の発掘調査を実施した。その結果長さ10cm、幅3cmを超える大型石刃を主体として、これに小石刃と定義的な斜軸尖頭器が伴う、これまで日本旧石器研究では知られていない大型石刃インダストリーを検出した。

そこでその起源を知るために、ユーラシア大陸の初期後期旧石器時代(IUP)石器群であるタジキスタンのフッジ遺跡、ウズベキスタンのオビ・ラフマート洞窟、ロシアアルタイのカラ・ボム遺跡、中国寧夏の水洞溝遺跡の石器群と詳細に比較した。その結果、香坂山インダストリーには大型石刃生産技術において、ユーラシアIUP石器群にみられる中期旧石器的な平面剥離型と後期旧石器的な立体剥離型、中間的な小口面型の3つの技術が含まれていた。小石刃生産技術には、大型石刃を石核素材としてユーラシアIUPの示準石器とされる彫器状石核と、レヴァントの中前期旧石器文化に起源をもつ横断面取石核を組成する。そして定義的な斜軸尖頭器を一定量組成するため、これら石刃石器群に中期旧石器的な尖頭器が共伴している。

このような技術上の共通点から、香坂山遺跡はユーラシアIUP石器群の系譜を引き、その特徴を比較的よく留めた後期旧石器時代前期(EUP)石器群が、日本列島に流入した証拠と評価される。

35 ka cal BP以前の放射性炭素年代値が得られている日本列島の後期旧石器時代初頭の石器群をIntCal20で較正して比較すると、

香坂山遺跡は現在のところ較正年代の2標準偏差の中央値の平均値が36.8 ka cal BPとなることから、列島最古の石刃石器群となる。そして、37.5 ka cal BPまでに成立していた台形様石器群とともに、36-35 ka cal BP頃までに両者が一体化し、列島の後期旧石器文化の基本をなす二極構造が成立した。これが日本列島における後期旧石器文化成立に係る構造変動の実態であった。
(国武貞克)

藤原秀樹
北海道における縄文・
統縄文時代の副葬品と被葬者者
北海道考古学 第58輯
p.25~p.44

北海道では縄文時代から副葬品が多種・多量であり、男性は石棒、弓・石鏃等の狩猟具や石斧・スクレイパー等の工具・獲物処理用具、女性はミニチュア土器等の食物関連、石錐・つまみ付きナイフ等の皮革・衣服関連具や漆塗櫛等の装身具とするなど、副葬品から被葬者の性別や性格等が推測されてきた。しかし、その帰属に明確な根拠が示されたものは少なく、玉類は検討する遺跡により男性・女性と推測が異なる、あるいは性差があるとされた副葬品が同一土坑墓で共伴する等の矛盾もある。

このような副葬品と被葬者の生物学的な性差や性格等との関係は人骨共伴例を基礎とすべきであることから、北海道における性別・年齢ともに判明する縄文・統縄文時代の人骨検出例を集め、その副葬品等の諸要素を検討した。

その結果、縄文時代の男性は多数の石鏃等の狩猟具、石器製作に関連する礫石器、石棒、漆塗櫛等や動物骨、女性はつまみ付きナイフ、台石・石皿等の調理に関連する礫石器、両性は少数の石鏃、石斧等が副葬され、玉類等の装身具は形状・材質・有無等により性差・年齢段階差がある。統縄文時代は

前半期の男性に骨角器等の漁撈具が増加し、石鏃・剝片等の数量も増える一方で、縄文時代では女性・両性に帰属していた多くの副葬品が男性に移行し、女性特有のものは激減する。年齢段階では壮年・熟年に副葬が多く、老年は生業に関わる石器類や装身具が減少する。墓へのベンガラ散布・坑口部配石での性差は少なく、屈葬の土坑墓では縄文前期・中期・後期前葉・晚期後葉・晚期末葉～統縄文初頭・統縄文前半期で女性の坑口部規模が小さい、等のことが判明した。

この副葬品は縄文・統縄文時代の生業・職能や性的分業と密接に関連しており、とくに統縄文時代前半期以降はその種類・数量の増加と偏りから、男性への関心・威信の高まりと複数役割の統合者の存在を推測した。
(藤原秀樹)

足達悠紀
6・7世紀の須恵器編年考
—北部九州を対象として—
九州考古学 第97号
p.1~p.26

須恵器の形態は全国的に一定の齊一性が保たれていることを特徴とするが、古墳時代後期には各地で微細な地域性が生じており、各窯跡群出土須恵器が全て同一の変化を辿るものではないことが指摘してきた。こうした認識が定着しつつある一方で、現状では窯跡群ごとの型式学的検討に基づいた形態変化の検討が十分に行われているとは言い難い。そこで本稿では、北部九州において比較的長期的に操業する窯跡群（牛頸窯跡群・八女窯跡群・宗像窯跡群・井手ヶ浦窯跡群）を対象に、各属性の形態変化に焦点を当て、型式学的検討によって窯跡群ごとの須恵器の変遷過程を整理し、北部九州における6世紀から7世紀の須恵器編年について再考した。原則的には次に示す属性分析の手続きを

特集 キリスト教墓研究と考古学

キリスト教墓研究の最前線	小林義孝
キリスト教墓研究の視角	
キリスト教墓研究の歩み	田中祐介
キリスト教墓碑の布教期から潜伏期への移行	大石一久
近世墓制におけるキリスト教墓	谷川章雄
キリスト教の葬送儀礼と墓	森脇優紀
キリスト教墓と墓地	
千々石ミケル夫妻墓所	大石一久・田中祐介
宣教師シドティの墓	池田悦夫
千提寺キリスト教墓地	合田幸美
下藤キリスト教墓地	神田高士
高槻城キリスト教墓地の再検討	小林義孝
キリスト教墓の副葬品	後藤晃一

編集室より

- 本特集号では、埴輪をテーマに最新研究をまとめていただいた。本誌では3度目の埴輪特集号となる。本号では、近年の発掘調査成果や研究の進展を総括し、埴輪研究の現在地が一望できる。
- 王権の埴輪についてまとめた前半部は、中枢部の埴輪を円筒、器材、家・圓形、動物、人物に区分して、その構成と展開を一覧でき、また近年埴輪窯跡の発掘などから著しく深化した生産体制研究などの論考が寄せられた。
- 後半部は対比的に地域社会の埴輪を具体的に検討し、王権との関わりの中で、時期ごとに個性的な在り方をみせる地域社会が描かれる。
- 古墳時代の王権や社会の実態を探る上で、埴輪研究が大きな役割をもつことを改めて認識させるとともに、埴輪研究の多様な魅力と可能性がつまった特集号となった。
- 連載「考古学の旬」では、縄文時代の石棒類を中心に行き交う考古学的儀礼研究の新たな方法を提示する。また、連載「私の考古学史」では、井川史子氏にアメリカを拠点とした研究人生を振り返っていただいた。
- 次号は、キリスト教関連遺跡の近年の発掘調査成果や研究動向をまとめます。ご期待ください。(桑門)

▶本誌直接購読のご案内◀

『季刊考古学』は一般書店の店頭で販売しております。なるべくお近くの書店で予約購読なさることをおすすめしますが、とくに手に入りにくいときには当社へ直接お申し込み下さい。その場合、1年分の代金(4冊、送料当社負担)を郵便振替(00130-5-1685)または現金書留にて、住所、氏名および『季刊考古学』第何号より第何号までと明記の上当社営業部まで送金下さい。

キリスト教墓碑

キリスト教墓碑研究の現状	田中祐介
関西のキリスト教墓碑	丸川義広
潜伏期のキリスト教墓地	
肥前の潜伏キリスト教墓地	
—近世を通して築かれた佐賀藩深堀領飛び地の長墓群—	大石一久
天草の潜伏キリスト教墓地	松本博幸
奥州のキリスト教類族の墓	遠藤栄一
リレー連載：考古学の旬	
私の考古学史	坂詰秀一
最近の発掘から・論文展望・書評	

本号の編集協力者

廣瀬 覚（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城发掘調査部飛鳥・藤原地区考古第一研究室長）
1975年島根県生まれ。立命館大学文学部史学科日本史学専攻卒業、同大学院文学研究科博士課程前期課程、同後期課程修了。博士文学（立命館大学）。主な著書に『古代王権の形成と埴輪生産』（2015、同成社）、『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告』（編著、2017、同成社）、『極彩色壁画の発見 高松塚古墳・キトラ古墳』（共著、2022、新泉社）などがある。

本号の表紙

五色塚古墳出土埴輪一式

神戸市五色塚古墳は墳丘長194mの前方後円墳で、前期後葉としては王陵に匹敵する規模を誇る。出土埴輪の大多数は鰐付円筒埴輪で、器財埴輪には家・盾・蓋・鞍形がある。約500個体が検出されており、王陵級古墳の埴輪生産組織像が判明する稀有な事例である。鰐付円筒埴輪は、透孔配置や口縁部高、ヘラ記号などに製作グループごとの相違が認められる一方で、全体を通じて突端間隔は17.5cm、底部高はその2倍の35cmに規格化されており、大規模でありながら細部にまで統制の行き届いた生産組織像が浮かび上がる。これと特徴を同じくする埴輪は、五色塚古墳を起点に東西25km以上の範囲に広く分布する（口絵1頁目参照）。（神戸市文化財課提供）

季刊 考古学 第163号

ARCHAEOLOGY QUARTERLY

2023年5月1日発行

定価（本体2,400円+税）

編集人 桑門智亜紀
発行人 宮田哲男
印刷所 株式会社ティーケー出版印刷
発行所 (株)雄山閣 <http://yuzankaku.co.jp>

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-6-9

電話 03-3262-3231 Fax. 03-3262-6938 振替 00130-5-1685

◆本誌記事の無断転載は固くおことわりします

ISBN 978-4-639-02898-7 printed in Japan